

# 「戦争トラウマ」実態公開へ

## 国が初調査 7、10月に企画展

アジア・太平洋戦争で旧日本軍兵士が負った「心の傷」の実態について、国による初の調査の結果が新年度、一般向け

に公開されることが決まった。厚生労働省が所管する戦傷病者史料館「しようけい館」(東京)の運営有識者会議が12日に開

かれ、方針が了承された。戦場体験によるPTSD(心的外傷後ストレス障害)といった兵士の心の傷は近年、その家族

らが「戦争トラウマ」として証言活動を広げ、注目されてきた。国は今年度、旧軍の病院や日本傷痍軍人会などに残されたカルテや体験記を収集してきた。集まった資料を整理分析し、7、10月に企画展を開く。来年2月には常設展を始めるとい

う。ただ、元兵士の家族からは、当時「戦傷病者」と診断されなかった人の中にもトラウマに苦しんだ人が少なくないとの声が上がっている。

「PTSDの日本兵家族会」の黒井秋夫代表は「一歩前進」と評価しつつ、「元兵士や家族の苦しみの実態を伝えるため、より広範な実態調査を行うべきだ」と話した。

せ、タイ・ビルマ間の鉄道建設部隊にいたことを知った。捕虜や現地の人を酷使して多くの犠牲を出し、「死の鉄道」と言われた泰緬鉄道。「父は加害に加担していたのかもしれない」。その苦しみ思いをはせた。

戦争で心の傷を負った元兵士の家族が体験を語り合う会の活動に参加。自身の家庭内暴力も打ち明け、「暴力の連鎖をどうやって断ち切るか、学んで人生を終えたい」と声を震わせた。

## 妻に暴力憎かった父と同じように



市原和彦さんの父・徳太郎さん市原さん提供



市原和彦さん

海水浴に行くバスの車中、酔った父が突然「この淫売女が!」と母を怒鳴った。母の顔に酒を浴びせ、殴りかかる。8歳だった市原和彦さん(73)の脳裏に今も焼き付いている光景だ。

父はビルマ(現ミャンマー)帰りの復員兵だった。まれに「東京から青森までの距離の鉄道を1

年で作った」と自慢したが、現地で何をしてたのかは、はぐらかした。酒乱で、泥酔して帰ると母を布団から引きずり出して殴った。市原さん兄弟も、木に縛り付けられたり井戸の冷水をかけられたりした。

家から逃げ出さないと。高卒後、親元を離れて働いたが、どれも長

続きしなかった。「人間不信の塊だった」父が59歳で亡くなった時は、「さあみろ」としか思わなかった。母は亡くなるまでの30年間、精神科病院を転々とした。市原さんは、母と同じ病院の患者だった女性と知り合い結婚した。

(後藤泰太)